

I-1. 生涯学習としての専門科目の試み

放送大学助教授 杉浦 克己
(書誌学・古文書学主任講師)

1. 科目開設決定までの経緯

本学は教養学部単科大学として設置され、生涯学習の見地からも、既存の学問領域の枠にとらわれない、最新の幅広い学的成果を提供しようとしている。しかし新規開設や改訂の科目の具体的内容の詳細にまでわたって、専門外の教員も含めたメンバーでこれを考えることは事実上不可能に近い。従って「教養学部」の中に学生の所属専攻に対応した専攻部会を置き、教員はこれに所属するという体制を採っている。授業科目や研究など、主に教務関係のことがらは、先ずこの専攻部会で取りあげ、その上で教務委員会、教授会、評議会などの全学的な機関に提案される。つまり「既存の枠にとらわれない」といっても基本的にはそれぞれの専攻による専門の立場からの意見が基本となるのである。これは「広い」と「高度・最新」を両立させる為に重要な役割を果たしている。

私の所属するのは「人間の探究」部会であるが、これは既存の大学の人文系学部全般の領域に相当する。従ってかなり広い分野を扱うこととなり、特に科目の内容や担当者の人選といった専門性の高いことがらに、全ての専攻所属教員が並列に携わることは、これも事実上不可能である。そこで既存の人文学系の学部内組織にほぼ対応して、哲学・文学・史学・芸術・文化人類学（地域研究）の分野にさらに細分化し、具体的な詳細を検討することになっている。ただしこれは、組織としてそのような専門分野が設置されているのではなく、設立当初の設置科目の分類に従った便宜的なものであり、人的な面でも扱う内容の面でもかなりの部分で流動的な要素も多い。ただやはり科目の改訂や開設を決める際には、全体として科目数の総枠（放送可能数）が決まっている以上、たとえば文学の分野の旧科目の代替については、文学担当の教員が先ず検討することに事実上なっている。

開設科目の決定は、大略以上のような手順で行なわれるのであるが、今回担当することとなった「書誌学・古文書学」を含む平成6年度開設科目は、若干これとは異なる経過で生まれたものである。

教育課程の大綱化は、全国的な大学教育の潮流であるが、本学でも開設以来10年を迎え、当初の科目は2回の改訂を経たものもでてきており、これと併せて、全学的に教育課程の見直しが行なわれた。この一環として、従来別置されていた外国語関連分野が、必修枠の削減とともに、教員の人的配置も人間の探究に吸収合併し、より広い「人文」分野を扱うこととなった。これに伴って、従来は外国語分野の担当科目として置かれていた外国文学関連の諸科目を大幅に整理統合することとなり、専攻部会の席に「どの分野の枠でもない」授業枠が数科目分上程されることとなった。そこでこれにどのような内容の科目を充当するかを、「いったいどのような科目が必要なのか」という立場から、分野を越えてかなり時間をかけて討議する、いわば本来の科目開設決定の姿に戻った議論が行なわれたのである。そこで話題に上がった科目内容の例としては、例えば「論文・レポートの書き方」「分野横断的な基礎的な思想史、あるいは現代

思想」のように、10年の教育活動を経て、改めて必要と認識されたものであった。

「書誌学・古文書学」もこの議論の中で生まれた内容である。そもそもの出発点は「古文書のようなものを読んでみたい、という学生は多いのではないか」という発想であった。一般に「古文書」は歴史学の一分野として扱われることが多く、実際の文献資料を用いて「古文書演習」のような形で置かれている例が多い。しかし今回の提案の発端は、上のような事情から、該当分野の担当教員のみによる提案ではない。従って取り扱う内容も、提案された各科目ともある程度の幅を持たせるものである。この提案も「古文書」ではなく「古文書のようなもの」であり、「講読」や「演習」ではなく「読んでみる」なのである。

分野を越えて議論の結果得られた大筋を、どのような内容で具体化するかは、むしろどの分野の誰が担当するかにゆだねられた形で進められ、これは同時に議論された他科目でも同様であった。少々乱暴な決め方のようにもあるが、生涯学習という観点で広く受講者から「求められる」ことと、大学教育としての学的水準や専門性とは必ずしも一致はしない。その間の整合を取る方法としては、むしろこのような進め方の方が的を射たものとも言える。その意味では、本学の本来の機能に立ち返った議論が、開設以来一区切りを迎えようとするところで行なわれ、その中から生まれてきたものの一つなのである。

本科目も含めてこの時話題に上がった科目の多くが複数の分野にわたって共通基盤となるような内容であったことは、この間の議論の経緯を端的に示している。これは、これまでの教育経験から、大学レベルの専門教育の前提となる基礎・基本的な内容の必要性を痛感していたことにもよるが、むしろ受講者自身の新たな知識や考察の基盤となる内容、つまり受講後もいかようにも応用発展が可能な内容を提供すべきではないか、との考えに基づくところが大きい。発展可能性は生涯学習の観点から教育課程を考える上で、常に念頭に置くべき重要な要素である。「馬を水辺まで連れていくことはできるが、水を飲むのは馬自身である」とは、学校教育の分野で学習意欲の問題についてよく言われる例えである。学生を動物に例えるのはどうかとも思うが、生涯学習の観点では、水辺まで連れていくのではなく、「水が飲みたくなるようにしむける」ことの方がむしろ考えるべきなのではないか。つまり様々な水場を広く提供し、実際にどの水場に行くかは馬自身に決めてもらってもいいのではないかと考えたわけである。

2. 『書誌学・古文書学』という科目名

さて、上記のような経緯で開設が決定された「古文書のようなものを読んでみる」科目を、私が担当することになったわけであるが、私自身は国語史が専門であって、元々の「古文書」という発想からすればあまり適任ではない。むしろこれは当然歴史学の分野の担当である。また古典文学の方面との関わりも深い。ただ歴史学で古文書を扱うとなれば、当然資料の「形」に関わることがらや「どう読むか」等はあくまで入り口の問題であって、そこからどのように歴史的事実を読みとっていくか、という資料解釈が主眼となる。これは文学の分野で文献資料を扱っても同様になるはずである。とすれば上記に述べたような当初の考えとは少し異なったものにならざるを得ない。もし歴史学の専門的見地からのみ、文献資料に関わる講義が必要であれば、それはそれで本科目とは別に開設した方がより効果的であるということにもなるであろう。そして事実、日本史関係ではその後「日本古代文献講読」～「日本近世文獻講読」の一連

の科目が、面接授業で開設され、学生との直のやりとりの中で、文献資料の解釈が扱われることになり、また西洋史の分野でも同様の検討が進んでいる。国文学では概説的な放送授業の内容と呼応して、具体的に個々の文学作品の解釈・鑑賞を扱う面接授業が当初から併設されてきているのである。

とすれば、むしろ歴史学や国文学分野ではない見地から、文献資料を扱った内容を考えた方が、より当初の考えに近いことになる。特に国語史では、文献資料の一文字一文字がそのまま立論の根拠となるため、資料の吟味に神経を使わざるを得ないことが多い。その立場からすれば、国語史そのものを扱うのではなく、そのよって立つ資料の「形」について述べることも比較的容易である。そのようなことから、私が引き受けさせていただくことになったのではあるが、そのような「形」だけの問題では、「学」と銘打って講義として開設することにはならない。何か全体を見通す基本を置かない限り、「名品カタログ」になってしまうのではないかとも思われる。そこで国語史の分野の、文学史・表記史の領域から視点を得て、「人がものごとをどう書き表してきたか」という点で様々な文献資料を紹介して行く、ということを考えてみたわけである。

欧米の言語学では、一般に言語史というと比較言語史・言語系統論を指す場合が多く、文献資料による言語史学は、文献言語学あるいは単に文献学 (philology) と呼ばれている。国語についての史的研究は、多くの場合この後者に近いのであって、その意味では、私自身にとってもやりやすい内容ではある。従って科目の名称を「文献学」とするのがもっともふさわしいのではあるが、これは少なくとも我が国ではあまり一般的な名称ではなく、また従来「文献学」として進められてきた諸研究とここで考えることは必ずしも一致しない。先学の成果ということからすれば、池田亀鑑博士の『古典の批判的処置に関する研究』に、ここで扱うことは全て含まれることになるであろうが、「古典の批判的処置」という題を付けても、池田博士の著書を知らない人にはほとんど理解されないであろう。中国では「訓詁学」「注釈学」「目録学」あるいはそれらの総称として「小学」の名称があるが、一般的でないという点ではこれらは「文献学」以上であると思われる。

既存の大学の講義にはない新たな目的を持つ本学では、新規科目の開設にあたってその名称の決定に苦心することが往々にしてあるが、この科目もまさにそういったものの一つであった。開設に至った議論の原点に立ち返ると、やはり「古文書」の名を入れた方がよりわかりやすいであろう。ただ必ずしも歴史学に関わる分野だけではないことは、上にも再三述べたとおりであって、私自身の専門から言っても、扱う文献資料は、「一枚の文書」よりむしろ、書籍の形になっている文献資料が主であり、その基本的な吟味や取り扱いは、学部の頃に「書誌学」の授業で身につけたものである。そこで甚だ折衷的ではあるが『書誌学・古文書学』という名称を付け、当初の意図したところを表そうと考えたのである。

ただ同時に決定した英文の講義名には“Philology of Japan”とした。これは“Historical Study of Japanese Language”を専門とする者が担当する講義名として最もふさわしいと考えたからである。

3. 講義内容の組立

さて、関係機関の議決も経て、実際の準備に入ってから先ず考えたのは、実際にどのような講義内容を組み立てるかである。扱う内容から考えると、既存の大学向けテキストの類や実際に各大学で行なわれている講義等は、個々のことがらについては役立てることができるであろうが、全体の構成はそのままの形であまり参考にできない。開設の基本からすると、できる限り多様な文献資料を取り上げることが、最も重要であろうと考えられることから、まず基本的な考え方として、資料をその内容で分類して考えるのではなく、外形（表面上の表記の違い）を第一に分類してみることにした。内容を第一に置くと当然その解釈が大きな意味を持つことになり、本来の意図からはずれざる虞がある上、なるべく多様なという点も難しくなる可能性がある。そこで文献資料を大きく「平仮名」「片仮名」「漢文」に分類し、仮名以前の上代を別に、漢文を漢文そのものとして書かれたものと訓読されたものの二種に分類、書状は独立、と考え進めて、「上代文献」「平仮名文書」「漢文文書」「訓点文書」「片仮名文書」「書状」の6項目を中心に据え、各々について実際の資料を示して「読み方」を解説することを講義全体の一つを骨組みにした。さらにこれらの周辺の基礎知識となる書誌的なことがら、書道史的なことがら等と、言語史学的な観点からの「書く行為」の意義付けを周辺に配して、実際の読みの講義と周辺知識とほぼ半々に充てることで全体を構成してみた。

これによって考えたのが以下のような15回分の章立てである。

- (一) 「書く」ということ
- (二) 上代の書記法
- (三) 紙と筆記用具
- (四) 書物の形状とその取扱い
- (五) 保存・修補と閲覧の実際
- (六) 読解の実際（平仮名文書）
- (七) 読解の実際（漢文文書）
- (八) 読解の実際（訓点資料）
- (九) 読解の実際（片仮名文書）
- (十) 読解の実際（書状）
- (十一) 古筆
- (十二) 版本
- (十三) 辞書の歴史
- (十四) 校合
- (十五) 書記法の変遷と現代の書記法

全体の構成と併せて、具体的な内容の基本方針を検討した。全15回の組立には、主任講師がほぼ全部の回を担当する場合と、各回の内容に合せて、数人で分担して扱う場合とがある。特に扱う範囲が広く、個々の回の分野についての専門性が高い場合には後者の方法が採られることが多い。本授業で扱う内容も、範囲が広いという点からすれば後者の方法を採用の方がより

まとめやすいとも言える。しかし高度な専門性は、当初の本授業の目指すところでは必ずしもない。逆に言えば、分担した専門家もかえって内容の組立に苦慮することにもなりかねない。様々な文献資料を「文字言語」として通覧するところに、文献言語学の意味あいを求めているのであるから、論の主たる部分は全15回を通じてそこに置き、個々の資料一つ一つについて、専門的な深まりを持たせることにはあまり主眼を置かない方向で考えることとした。

従って、国語学の立場で考えた本授業の中心は、具体的に個々の文献資料を挙げ、文字・表記を主な観点とした国語史上に位置付けて行くことになる。これによって国語史の方面への受講生の興味関心を喚起できれば最も願う所であるし、歴史学や古典文学など他の分野についての同様の役割もまた、当初から目標とする所でもある。さらに「ものの書き表し方の変遷」というとらえ方は、これらの分野について既にある程度勉強を進めている受講生にに対しても、新たな視点を提供し得る可能性を持っている。

ただこのようにすると、資料についての具体的な解説と、その資料を読む上での基本的な知識や技術についての解説が、必ずしも一連のものとはならないという可能性が生じる。例えば、歴史学や古典文学の立場で実際の文献資料を扱うのであれば、先ず資料を読む上での基本的な知識についての解説があって、その上で、実際に資料を読み解き、解釈に至る、というように一連の流れでこの間を展開できる。しかしここで考えたのは、文学史・表記史上の位置づけであるから、このようには必ずしも行かないのである。

そこで印刷教材では、各章の資料についての解説の後に「附」として、

- 附・翻字について（一章）
- 附・万葉仮名の読み方（二章）
- 附・変体仮名の読み方（六章）
- 附・行草書漢字の読み方（七章）
- 附・書き下し文の書き方（八章）
- 附・片仮名の読み方（九章）
- 附・字体・字形・書体、異体字（十四章）

のように、これらに該当することがらの解説を、各章で採り上げる文献資料に対応させる形で別置することにした。また放送教材の方では、説明の仕方を、基本的な知識から入るのではなく、文学史・表記史上の位置づけから始め、「だから実際の資料はこういう書き様になっている」のであって、「読む上ではこういう点に注意しないと・・・」と展開する構成を考えてみた。印刷教材・放送教材とも、冒頭と末尾の回に文字・表記の変遷を通覧できるような、国語史的な観点を主にした内容を置くことにしたのも、この間を明らかにしておくためである。

4. 具体的な内容の検討

科目の設置が正式に会議に上がってスタートしたのは、平成4年9月の、教育課程編成会議である。これまでの間に以上のような大略を自分なりに決定し、同年の秋以降はこれに従って具体的な内容を作成する作業に入った。放送開始までの日程を考慮すると、先ず印刷教材の方

の大略を明らかにしておくことが必要であろうと思われた。

しかし実際に草稿に着手し始めると、改めて本科目の目的を具体化することの難しさを感じざるを得なかった。ここで取り上げようとしている「いかに読むか」ということは、自身の経験を振り返っても、そのみを体系的に扱った大学の講義や概説書の類などはあまり思い浮かばない。あくまでそれは手段であって、何か別の目的で受けた、例えば「国語史演習」「古文書講読」などの中でいわば自然に徐々に身につけたものである。従ってそのみを抽出して、改めて15章に体系化することは、「文学史・表記史」というバックボーンを用意しても、具体的にはかなり困難な作業である。参考となる先行のテキストの類もほとんどない。その元となるべき学部時代の経験も、あくまで「演習」や「講読」であって、改めて自分の古いノートを開いてみても、「国語史演習」では、資料とそこから得られた国語史的なことがらしか書かれていない。むしろノートの記述を頼りに記憶を呼び起こし、当該の授業の少人数の会話の中で先生がちらっと教えて下さった、端々の知識をかき集めて一本の糸に紡ぎ直すようなことが主になってしまうのである。国語史方面のことであれば、ある程度これに確かな根拠を与えることもできるが、専門外にわたる資料ともなると、甚だ心許ない基盤の上に立って内容を組み立てていくことになってしまう。

そこで自分の記憶を頼りにある程度形になったものについて、当該分野の専門家の方々の見解を伺ったりすることも再三必要であった。歴史学、古筆学、書道等の分野については特にこのようなことが顕著であった。本来ならこれらの方々に分担執筆をお願いするべきなのであるが、先述のようなことから、敢えてそのような方法は採らず、私個人の考えとして全体の中に組み込んでいくこととしたため、様々にご教示いただいた多くの方々のお名前は表には全く出ないこととなった。これは印刷教材・放送教材共にであるが、授業開始後の受講生からの質問等への対応等を考えると、結果的にはこのようにしたことがよかったようにも思われる。

放送教材の具体的な制作については、年明けから担当ディレクターの平塚千尋氏との本格的な打ち合わせを開始した。

TV放送に出演したことはおろか、その制作に関わった経験も皆無であり、これについては、何をどう準備すればよいのかの見当も付かない状態であった。既に収録を経験されている諸先輩の先生方から色々伺ったりして、画面や構成についての自分なりの考えをまとめたりもしてみたのであるが、実際にディレクターとの打ち合わせに入ってみると、これはあまり役立たないことがわかってきた。一本の放送教材をどのような画面と音声で構成していくかは、視聴者としての経験しかないものにとっての予想とは全く異なる性格のものなのである。むしろ担当講師としては、その回で「何を使っ」て「どういうことを述べ」たいか、を示すことに徹すべきであって、それを「どう表現するか」こそをディレクターに考えていただくべきである、ということに気が付いたのは、打ち合わせもかなり具体的に進んでからのことであった。

また実際に画面に映してみると、どのような資料がより受講生にわかりやすいか、という点も、打ち合わせの中でだんだんはっきりしてきた。これは印刷教材の方に写真版として掲げたときのわかりやすさとは必ずしも一致しない。従って取り上げる資料についても、打ち合わせの中で当初の予定からかなり変わって行かざるを得なかった。

基本的には、活字に翻字して読み方を問題とする場合でも、先ず翻字前の写真版を示し、実際にはどういう書き様になっているかを受講生にある程度理解してもらうことや、外形や材質などが問題となる資料（例えば、木簡、書籍の形状、紙の種類、版本など）は実物を用いることになるが、文字そのもののみのばあいには、より鮮明な写真版を活用する、等の点を念頭に置いた。特に後者の点は、実物を実見するよりも、修正や画像処理等で筆勢や細微な記号などがより明瞭である場合が多いことによる(図1参照)。つまり資料実物の質感や雰囲気伝えることと、文字として「読む」場合のわかりやすさを両立させたかったのである。これは同時に、先にも述べたように、専門科目として学的な内容と生涯学習的な観点からの興味関心の喚起、という二点の両立である。これに従って資料の保存、製紙工程など、その場に行かなければわからないようなことがらについては、ロケーションを配することとし、その計画も大略が固まった。

スタジオ収録で取り上げる資料もこのような観点から選んでいくことにした。つまり、学的に見て価値の高い重要な資料を優先させることはもちろんであるが、それを画面に映した場合にどうなるか、という観点も併せて必要だったわけである。例えば第8回の『訓点資料』で取り上げたものの一つに「正宗文庫本長恨歌」があるが、これは漢籍系統の訓点資料としては、量的にもまた時代的にも、あまり従来重視されてきたものではない。しかし比較的書写年代が新しく、保存も良く、訓点以外の書き込みも少ないために朱のヲコト点が明瞭で、画面上でヲコト点の説明をするには好都合のものである(図2参照)。さらに「長恨歌」は広く親しまれている漢詩の一つで、史書や経書の類より受講生にも受け入れやすいと思われ、現代の訓読とは異なった訓読があることを示すにも向いている。生涯学習的な観点での興味関心の喚起には、学習者の既存の知識の有効な利用が効果的であるが、この資料などはまさにその好例である。もし通常の大学の「訓読史」等の講義で入門期に取り上げる漢籍系統の資料であれば、多様な訓点や字音との関係など多くの点を述べることができる他の資料を用いるはずである。訓点資料に限らず他の回でもこの点から考えたものが多い。

5. 収録の実際

私の考えるところをどのように画面に具体化するかは、ひとえに担当ディレクターの平塚千尋氏およびNEDの田原孝雄氏のご尽力によるもので、私はもっぱら思いつくところを次々と注文してだけで、その他の心配は皆無であった。しかも「それはできません」的なことは全くなく、むしろ逆に「こうすればできますよ」「こんなこともできますよ」と、言って下さることも度々で、私としては「TV」であることを意識してかかる必要はなかったことは、とても有り難かった。後で伺うと、技術的な面でも大変なご苦労があったようであるが、知らぬ者の強みで内容の構成に専念できたことが、結果的に最も大きかったように思う。さらに、昨今は著作権関係の手続きが煩雑で、本授業のように多種にわたる資料を大量に用いる内容では、その使用許可の申請に関わることも大きな障害になるかとの懸念があったのであるが、この点についても全く心配する必要がなかった。制作に関わる様々なご苦心や工夫については、本論の中で平塚氏が詳しく述べておられる所である。

準備が円滑に進めば、私にとっての最大の問題は実際の収録である。これにも、全く初めて

a

b

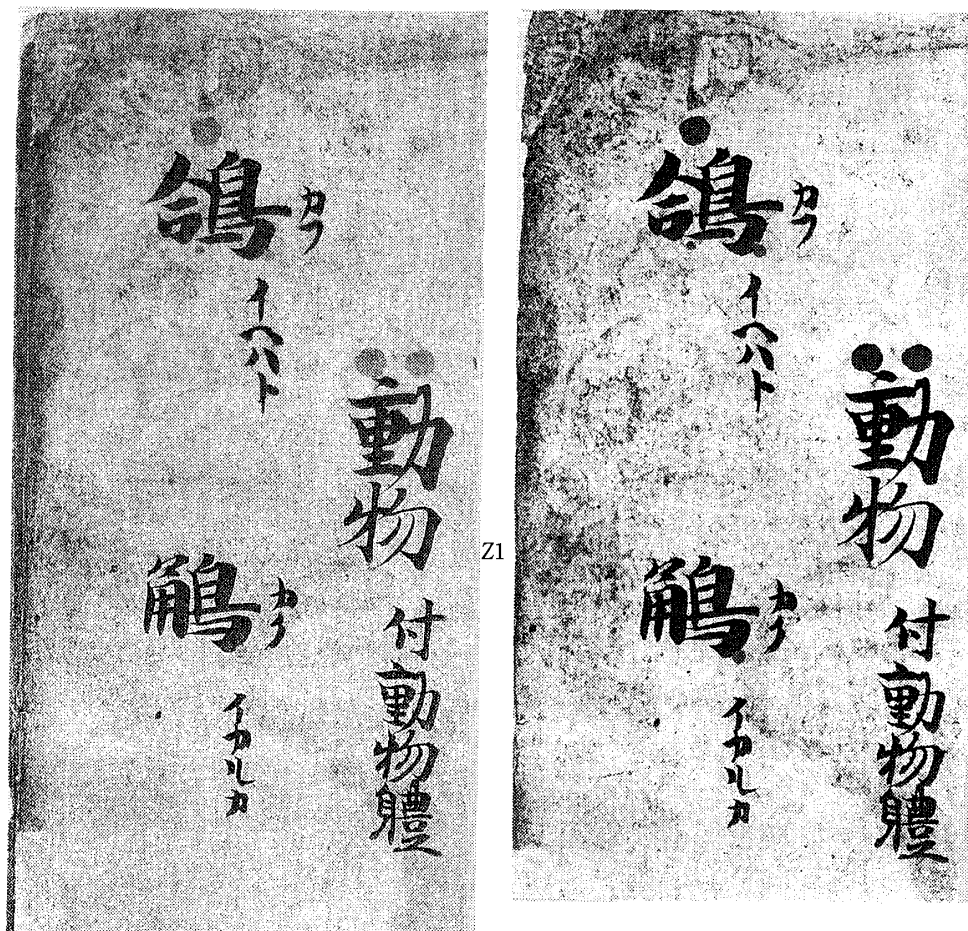


図1 第13回「辞書の歴史」で取り上げた、前田本『和名類聚抄』の例
aは現資料からの直接コピー、bは画像処理をした複製本からのコピー。画像処理によって、例えば「鳩」字や「鳩」字の右下に指された朱点がより明瞭になっていることがわかる。

の私を慮って、色々な点で配慮をいただいた。15回分の収録をその放送順にではなく、専門により近い内容の回から始めていただいたり、講義卓の中央に小型のモニターを埋め込んで、画面と手元の原稿を対比しながら話せるようにしてくださったり、と枚挙に暇がない。にもかかわらず収録の度に大変緊張し、「上がっ」てしまうの一語に尽きる状態であった。これは回を重ねてもあまり改善されなかった。どうやら「慣れる」と「緊張する」は単純に逆比例関係ではないようで、最後まで色々とお迷惑をかけてしまった。

後に、本学の収録とは直接関係ない所で、偶々以前に放送関係のスタッフの仕事に従事していた女性と話している時に、この折りのことに話が及んだことがある。話それ自体は言語の位相（特に男言葉と女言葉）についてのことであったが、彼女の言うには、プロのタレントではない人の始めてスタジオ収録では、多かれ少なかれ同様なことがあるが、一般に男性より女性の方が落ちついていて、うまく行くケースが多いとのことであった。その言から自らの収録を振り返ってみると、これはどうも「見られている」という意識に基づくものらしいと思い当たった。女性は多くの場合、ほとんど毎日、他人の目に自分がどう映っているかを、かなり意識

漢皇重色也思傾國
楊家有女初長成

図2 第8回「訓点資料」で取り上げた、正宗文庫本『長恨歌』
保存が良好で、字画や加点がわかりやすい。原本のヲコト点は朱であるがカラーで撮影すると、料紙の地色に映えてより明瞭である。

している場合が多いように思われる。しかし男性がこのようなことを意識するのは、かなり稀なことであろう。学生の前で直に講義をする時はむろんであるが、初対面の聴衆に話す講演のような場合でも、あまりそのようなことは考えない。ところがスタジオでカメラを前にすると、この「見られている」、しかも不特定多数の人の見られている、という感じが実にひしひしとしてくるのである。モニターに映った自分の顔など見てしまうと、これはまさに緊張の極みということになってしまう。ついついカメラではなくモニターの方に眼が行くのもこのようなことによるのではないか。この意識にとらわれない、あるいは何とか軽減できるような手だてがあれば、私のような場合には効果的ではないだろうか。

直接の解決策ではないが、収録の内何回か自分なりにこの点がとてもやりやすく感じられた回があった。当初はそれと気付く余裕もなかったのであるが、やりやすいと感じられた回は、正面のカメラ担当が特定のカメラマンの方であった。この方はベテランのようで、カメラ本来の仕事ぶりも、写されている方にもそれとわかる余裕があったばかりでなく、古い文献資料に興味を持っておられたようで、打ち合わせの合間や収録後などに、色々と質問をして下さった

りしたのであるが、本番の最中にも話の内容に聞き入って、時折は頷いたりしても下さった。そこで自然に話しやすくなり、またそれと気付いてからの回では「この方に話すようにしゃべればいいのだ」と思えるようになって、ずいぶんと気持ちが楽になったのである。スタッフはグループローションなので、いつもこの方が担当とは限らないが、別のカメラマンの場合も、怪しくなってきた時は「正面のカメラマンに話しかける」ように心がけることで、ずいぶんやりやすくなったように思う。後から見直してみると、はっきりカメラマンに向かって話しかけようとしている時は、若干視線がずれていることがわかるが、それでも話しぶり自体はよほど自然である。プロの方は話しかける相手を、カメラマンの方向ではなくレンズの方向に想定して話しているのであろうとも思える。カメラマンはじめスタッフにはそれぞれの役割があって、今回の場合はむしろ偶然ではあるが、どうしても話しにくい時には、カメラの方向にダミーの聞き手役を立ててもらおうとよいかも知れないと感じている。

6. 様々な反響

放送開始に先立って、完成した印刷教材と該当の回の収録テープを、意見や見解を頂戴した協力者の方々にも見ていただいた。歴史、文学、国語史、古筆等の方面の方々であるが、等しく先ず口にされたのは、『書誌学・古文書学』という標題について、特に「書誌」と「古文書」を同時に扱ったものが今までにはないこと、及びその重要性についてであった。同様のご意見は個々の分野の専門家ではないがここで扱った分野に近い、例えば国語教育学や図書館学等の方面の方々からもいただいた。これらは本授業が全体に「わかりやす」く、これまではいくつかの分野にわたってそれぞれの専門書によらなければならなかったことを、一つにまとめて扱っている点が大いということのようで、これは本来意図したことでもありがたいへんうれしいご意見であった。

逆に専門の立場からは、取り上げた個々の文献資料について、やはり「もう少し掘り下げるべきではないか」「このような取り上げ方でよいのか」とのご意見が多かった。この二点は実は表裏なのであって、科目開設の当初から予想できたことであり、掘り下げ不足とのご指摘もある意味では、むしろ「広く浅く興味を喚起しよう」という当初の期待通りなのではあるが、やはり専門科目としての学的な厳密さについて、もう少し慎重を期すべきであるかも知れないとも思われた。

特に内容の掘り下げや充実についての意見は、書道関係方面からのものが多かったように思う。これは本学の課程の中で、書を取り上げた科目がこれまで皆無であったことにもよると思われる。現在まで本学では芸術関係に、音楽、美術、演劇についての専門科目を開設している。これらと並んで「書」を取り上げるべきか否かについては、これまでも何度か話題に上がったこともある。しかし芸術系の専門学部等であればまだしも、一般には書を芸術学の講座として設置している大学は必ずしも多くなく、学としての体系化も、書道史的な観点を除いては、未だしの点もあるように聞く。むしろ小・中学校の国語科教育の一環としての「書写」を、教職課程の中に置いているのが多くの大学の現状であろう。(教職課程を設置することは当面の大学の目指すところではない。)

本学の受講生を考えてみた場合、芸術学としての「書」というよりは「書道」と呼ぶにふさ

わしい内容が求められているようにも思われる。本学では類似の例として「日本文化」の名の下で茶道について扱った科目があり、毎年多くの受講生を集めている。また専攻特論（卒業研究）にこの科目の発展として茶道を取り上げたいとの学生も多く、生涯学習的な観点から考えた場合の茶道の人気の窺える。おそらくもし仮に「書」を取り上げるとすれば、これと同様の傾向を示すことになると思われ、事実この『書誌学・古文書学』をそのような期待で受講した学生も多いようである。

先般公表された文部省の調査では「カラオケ」を文化活動と位置づけて物議を醸したが、そこまで極端ではないにしても、茶や書、華などの「道」は、大学の外の世界では「文化」活動の代表的なものとして受け取られているのであろう。それに近い所で大学教育を提供しようとする本学では、やはりこれは無視できないことと思われる。芸術学としての書や学校教育の書写ではなく、「道」としての書写をいかに大学の専門教育の中に組み込むか（先の茶道の例は「日本文化史」の中に位置づけたものである。また本授業では「文字史・表記史」に「書」を組み込むことを試みたわけである）は、先に挙げた書の専門的な立場からのご意見とも併せ今後の課題とすべき点ではある。

放送開始後にも、視聴して下さった方々から専門にわたるご意見ご指摘をいただいたが、こちらも書道関係からのものが多かった。歴史学や古典文学の専門の立場からすれば、本授業があくまで「文字史・表記史」を主眼に置いたものであって、その意味では他にそれぞれの専門分野を扱った科目を持つ本学の一授業としての本授業の内容を肯定的に見て下さることができても、本授業が唯一のものとなっている書道の分野からすると、やはり批判的にとらえざるを得ないのであろうと思われる。書道に限らず、「道」の類、さらには宗教の分野などを、学としてどのように教育課程の中に位置づけていくかは、今後にわたって本学の（特に人文系の分野の）大きな課題である。

受講生の反応の第一は、掲載された科目案内によってどれほどの人数が科目登録をするか、という点である。改訂ではなく新規に開設された科目の場合、開設当初の学期に登録が集中し、第二学期に以降漸減していくのが一般的な傾向である。人間の探究の専門科目では、本授業に近い国語史の分野を扱った『日本の言語文化II』（ラジオ）が、開設当初約300名余り、以後ほぼ毎学期200名程の登録を見ている。この数は日本語教育ブームの影響もあって、人間の探究の専門科目としてはかなり多い方ではあるが、ラジオとTVの違いを考えても、ほぼこの程度の数であろうと予想していた。しかし実際に平成6年3月末に集計された数字を見ると、予想に倍する601名の登録（実際に授業料を納入して学習を開始した者583名）があって、受講生の期待の高さが感じられた。おそらくこれは、これまで本学に該当する内容の科目がなかったということが大きいと思われる。

実際に授業料の放送が開始されて後の反応では、授業の第8回までの内容について行う「通信指導」および学期末の「単位認定試験」がある。通信指導の提出段階では当初の登録から100名近くが脱落して494名（通信指導合格者493名）となった。この不提出数は他科目と比較してもかなり大きい部類に入る数であったが、単位認定試験の実受験者はさらに100名以上が減って345名とかなり特異な結果となってしまい、これは重大なことと思われた。特に専門の立場から

の「掘り下げ不足」とのご意見を考えあわせると、やはり講義題目と科目案内の文言による受講生の期待を裏切ってしまうような内容だったのではないかと、この危惧が感じられたのである。

ところが実際に受講した何人かの学生に直接尋ねてみると、異口同音に「難しい」との感想で、どうやら危惧とは逆の問題もあったようである。綿密な調査をしたわけではないし、学生の言う「難しい」は、時として「量が多すぎる」、さらには「面白くない」の意を含むこともあるので即断は出来ないが、予想に反してこれでもまだ内容を盛込みすぎたようでもある。実際学期末の単位認定試験の結果を見ると、受験者平均72.9点、合格者(60点以上)303名、対受験者合格率87.8%と、こちらは他科目と比較してかなり高い数値となっており、何とか最後までついてきた学生にとっては、少なくとも「困難」な内容ではなかったように見える結果となっている。試験結果のSDが13.8と、比較的ばらつきが少ないこともこの証左ではあろう。よって当初の登録者に対する合格者の割合は52.0%と、結果においてはほぼ他科目と同様のところに落ちついている。

通信指導及び単位認定試験の問題は、受講生の数などが確定するよりも以前の段階で印刷に廻すため、開設当初の学期については、実態を見た上での調整は困難である。専門科目としての立場から言えば、本授業の主眼点である文字史・表記史に関する問題を主とすべきなのであるが、開設の意図からしても、国語史以外の興味から受講する学生も多いと考えられる。従って、国語史関連の問題は最小限に押さえ、取り上げた資料の関わる分野をなるべく広く採って出題することとした。また応用や考察を主とするのではなく、授業で開設した基本的な事項が身に付いているか否かを確かめるような出題を心がけたのであるが、これらのため結果的に、平易で基本的ではあるが、広い範囲から多様な問題を数多く出題することとなり、通信指導提出の段階で「難しい」(つまり「覚えなければならないことが多すぎる」)とあきらめてしまった者が多かったのではないかとも思われる。逆に最後までついてきた者にとっては同様の傾向で出題された単位認定試験はあまり困難ではなかったはずである。

通信指導の未提出者、期末の試験の未受験及び不合格者は次学期に再提出・再受験が可能であり、未提出・未受験者のうちでどれほどの者が再提出・再受験するかで、受講生が「期待を裏切られた」のか「難しすぎた」のか、という点はより明確になると思われるが、おそらくこれは両方とも真の実態なのであって、やはり当初から考えられた、専門性の高さと興味関心を喚起するための広さの両立の難しさが、学生の反応にも反映しているのであろう。

また、専門家でもなく受講生でもない一般の視聴者からの反応もかなりあった。多くの場合、15回を通してではなく、新聞のテレビ欄などによって偶々ある回を試聴したものが多く、さらには1本45分の全体ではなく、その一部分だけを見たというケースもかなりあった。このような場合、先の学生の反応でも述べた「難しい」という印象はさらに著しくなるようであった。印刷教材の方は1冊の本であるから、放送と離れてこれのみを読んでも、全体を理解してもらうことは容易いのであるが、放送の場合はそうは行かないことは、制作の打ち合わせ段階から担当ディレクターのもっとも気にしておられた点の一つであって、そのための配慮も心がけたつもりではあったが、教員としてはやはり本学の学生(正式な受講生)が念頭に立つことも多く、さらにもう一段の配慮の必要性が感じられた。具体的には、各回の独立性を強めて「読切

り」を心がけることが最も大きいであろう。この点は本学の正式の学生視聴者に対しても実は同様なのであって、生涯学習である以上、通常の専業学生の場合のように全回受講を前提とはできない、という意識は放送授業のみならず、他科目での面接授業（スクーリング）を担当した場合にも考慮している点ではある。

7. 今後の課題

とにもかかわらず「全く初めて」の状態から担当ディレクターの平塚・田原両氏、そしてスタッフの方々のご尽力によって、かなり明確な手応えのある番組ができ上がった。今後は「初めて」故に甘えさせていただいた多くの点を改めて問い直し、以後の放送授業の制作やプログラムにも活かしていかなければならないことが、私個人に課せられた最も大きな課題である。

本授業そのものについて改めて考えると、今後の課題は当面の放送期間である平成9年度末までの間に採るべきことがらと、次回改訂へ向けてのことがらに二大別できる。後者については、「改訂」が承認されての上のことではあるが、本授業の目指したことは基本的には間違いではなかったと思われる。その手法も、今回の制作でかなり確立することができた。従って意図しながら不十分に終わった諸点を徹底して行くことが、新たな内容の構築の基本姿勢となる。

前者は、既に授業が始まっている以上、細かいアフターケアの類が主である。初学期を終える時点までに、気になっていた点の訂正もさせていただき、また通信指導や単位認定試験などの学生の指導についてもかなり明確な見通しが立った。

ただ学生からの反応の中で一つ気になったものがある。それは受講生から送られてくる質問票（受講生は「質問票」によって担当講師に疑問点を聞くことができる。実際に送られてくる数そのものはあまり多くはなく、初学期も十指に満たなかった）の中に本授業の意図があまり理解されていないのではないか、と思わせるものはいくつかあったことである。つまり本授業を、取り上げた幅広い種類の文献資料のうちの特定のいくつかについてだけの、高度に専門的な授業と誤解しているのではないか、と思われる類である。これは全くの予想外の反応で、少々対応にも苦慮した所である。ただ、先に「高度に専門的な」と書いたが、改めて問ってみると、誤解の第一はその点そのものにあるような印象を受けた。特にこの種の質問は、これまでにセンセーショナルに報道されたり、ドラマ化されたり、ベストセラー書籍となったりしたようなことがらについて見られ、受講生自身がそれらの範囲で興味・関心を持っていた所に、それが「大学の授業」に取り上げられているのを見（しかもその取り上げ方が「広く浅く」である）て、あたかも自分の既存の知識が最新最高の学的成果にあたるかのように考えてしまったもののようなのである。ごく希な例ではあるが、考えてみると今後も同種の質問票が寄せられる可能性は大いにあるかとも思われる。特に今後全国化に向けて視聴者の範囲が現在とは比較にならないほど拡大することが計画されており、こういった誤解の可能性はより増大すると見なければならない。興味本位の娯楽報道と本学の放送授業を同一視すること自体が間違った視聴態度であることは確かであって、多くの受講生や視聴者はそのことをよく理解しているが、同じメディアから送られてくる情報である以上、混同するものが出てしまうのもまた無理からぬことである。

メディアとしてのTVの威力を思わぬ所で、改めて実感させられてしまうことになったのであるが、こういった反応に対しては、放送内容それ自体に十分な配慮をすること以上に、一方

的でない教育のための情報の相互伝達の手段の確保が必須であろう。一般的な文化教養番組として受け取る視聴者を無視できないことについては、内容の構成それ自体で対処しなければならないが、「大学の授業」として受け取っている者（つまり、本学の正式な受講生）が、他の一般の番組と同列に放送授業を考えてしまっていることは、かかって本学の教育上の問題だからである。

大学教育の何たるか、といったことがらは、既存の大学と並行に考えられないことはよくよく承知しているつもりではあったが、改めて考えてみるとこのような誤解は、特異な例として片付けられない問題を含んでいる。「生涯学習」は、「大学の授業」をそのまま大学外の人々に送りつければ成り立つ、といった単純なものではないことの端的な例である。